

平成21年7月15日

五小の風景 No. 4

五日市小学校長 国政 直文

大人の姿勢

先日、ある雑誌を読んでいたらこんな記事が載っていました。

「最近、目にした光景である。歩道前方を高校生らしき男子生徒が歩いている。その後方を70歳くらいの女性が手押しバックを重そうに引きずっている。その二人が階段を上ろうとした時、男子生徒が女性のバックを階段上まで持ち上げようと手を差し伸べたところ、女性は『結構です』と言ってその厚意を拒んだ。男子生徒は気まずそうな表情で、さっさと階段を上り去った。

同様の光景を電車内でも見かけた。女子中学生が目の前に立っている老女に席を譲ろうとして声をかけた。すると、その老女は、『次で降ります』と言って断った。席を譲ろうとした女子生徒は、厚意を無にされた恥ずかしさからか、隣車両に移動していった。彼女が空けた座席には、立っていた方が健康に良さそうなはつらつとした中年女性が陣取ったのである。

これら生徒たちは、今後、他者への手助けにためらうのではないだろうか。そうした場面に出会わした若者たちも同じ思いを抱くに違いない。」

私自身も学生時代に電車の中で同じような経験をしたことがあり、その時の照れくささと居たたまれなさを今でも覚えています。

今の自分にとっては必要ないから、他人の厚意を拒んで無にするということとは、相手の思いやる気持ちをそいでしまうことになるのではないのでしょうか。

この記事でいうならば、今自分はまだまだ元気だから男子生徒の力は借りなくてもいいとか、次の駅で降りるのだから今座る必要はないといったことは、今の自分にとっての必要性だけで他人との関係を考えていることになります。そういう必要性だけで他者との関係を考えるのではなく、この場合であれば、素直に男子学生への申し出を受け入れてバックを持ってもらう、女子中学生の厚意には「有難う」と言って席に座るといった行動をとってほしかったと思います。

こうした必要性とは関係のない行動が、子ども達や若い人たちの思いやる気持ちを育てていくのではないのでしょうか。

最近の若者は他人を思いやる気持ちがあまりないので、心の教育をしないといけないという言葉をよく耳にします。本当にそうでしょうか。もしかしたら、そうした若者たちにしてているのは、先輩である私達大人のちょっとした行動が原因の一つかもしれません。

「あいさつ」にしても同じようなことがいえると思います。「最近の子どもはあいさつをしない」という声をよく聞きます。こちらからあいさつして、あいさつが返ってこなかったら、いい気持ちはしません。でも、あいさつするという事は、相手からあいさつが返ってくることを期待してするものではないと思います。自分の思いからするのだと思います。そして、こちらから毎日続けてあいさつをし続けていると、時間はかかりますが、いつか返事が返ってきます。その時、やっと相手と心が通い合ったといえるのではないかと思います。



若者たちや子ども達の行動（思いやりがない、あいさつをしない）を責めるまえに、私達大人の姿勢や心構えを振り返ってみることも必要なのではないのでしょうか。

前期も3分の2以上が終わり、長い夏休みに入っていきます。子ども達全員、8月31日には、元気に登校してほしいと願っています。